

マーケット・アイ (99 / 12)

視点・金融市場

経済の体温計は株式市場であり、金利市場・為替市場である。そう固く信じている。その動向は、有力政治家の言葉よりも、有名アナリストの発言よりも素直で説得的ですらある。そして市場の発する言葉は、企業経営者はもちろん、市場とは関係ない人達にとっても重要で、しかも有益である。そう固く思っている。

私がレポートの題名に「マーケット」と付したのは、そうした思い入れがあるのであって、相場や株が好きとか嫌いとかには関係ない。マーケット、とりわけ金融市場に重大な関心を持つのは、かつて私が犯した無知の罪に対する深い反省があるからだ、と私自身思っている。

かつて私はマーケットの発するメッセージを全く理解する事が出来なかった。その意味すら判らなかつたし関心もなかつた。そのことが顧客をミスリードした事実は不定しがたい。そしていつも思い出すのが、あの90年初大発会からの東京株式市場の急落である。あの時、市場の発する声を少しでも理解していればという悔いは、今も心の片隅に残っている。

個々の投資家、個別の市場参加者は大概間違いをおかす。でありながら市場全体では、意味あるメッセージを流すことがある。金融市場のこの不思議な能力を侮ってはならない。そう思って謙虚に市場に耳を傾けてきた。それを伝えることが、きっと中小企業経営にも役立つ筈だと強く信じて。

迷走、ペイオフ

21日、金融審議会が、ペイオフ解禁後の新たな預金保険制度を答申した。審議会なるものは大抵そのような傾向があるようだが、ここでもペイオフ解禁については結論を政治に委ねた。そして、ペイオフ論議はここにきて以前にも増して迷走し始めた。

私なんぞは、金融資産が少ないからさっさと解禁すれば清々すると短絡的に思うが、預金流失を怖れる業界が政治家に泣きを入れて議論はあらぬ方向に向かって行く。金融秩序にとって最も重要なのは「揺るぎない信用」だと思うが、膨大なコストをかけて信用剥落の方向に向かっていると私には見えるが、どうだろうか。

生保、動き急

あの東邦生命の処理策がようやくまとまって、そのひどい実態の一部が明るみに出てきた。どうやら、多くの契約者が泣きを見るのは避けられないようだ(日産生命よりひどい模様)。

ところで、破綻生保処理の枠組みが固まる中で、当局は生保・損保の自己資本規制を強化する方針であることが報道された。その内容は、保険会社の支払い余力率(ソルベンシーマージンと呼んでいる)を算出する際の計算方法を厳しくするというものだ。今まで緩くやってきたのかと勘ぐりたくなるが(実際緩くやってきた)、ここで厳しくするという事は業界の整理再編を促進することを意味する。

生保同士で資本を出し合ったり、劣後ローンという名の負債性資本に過剰に依存したりと、外からは解りにくい操作で支払い余力率を上げるのは、もう不可能と信じたい。

地銀にも外国人大株主

外国人投資家が地銀株主に登場し始めたのは最近のことではないが、ビッグバンや金融再編の流れの中で、一部地銀で外国人持ち株比率が急速に上昇しているようだ。

この9月中間期では、七十七銀行10.1%、十八銀行8.1%、横浜銀行7.9%、福岡銀行7.4%という比率になったという。

こうした外国人株主持ち株比率の上昇は、地銀経営者にかなりのプレッシャーを与える。一部銀行はIR活動に注力し始めたようだが、株主重視の経営を迫られて来た結果とみるべきだ。株式持合い(白紙委任状)に安住出来ない時代となって、地銀も大胆な改革を行うようになる。経営者はそのことを自覚しておく必要がある。

銀行検査、年明け以降

今9月期決算を基準に、新「金融検査マニュアル」に基づいた検査が初めて行われる。金融監督庁は新基準での検査を年明け以降実施して行くようだ。新しい検査マニュアルがどのような影響を与えるか注目される。経営状況に応じて検査対象行も絞り込む模様で、その辺の動きも気になるところである。

1年間、いろいろ勝手なことを申し上げ失礼いたしました。99年もあと数日となりましたが、皆様それぞれに良いお年をお迎え下さい。